5. 研究者のアクセス手法Ⅰ

一橋大学附属図書館長　江夏由樹

日本、中国、台湾、オーストラリアにおける図書館・文書館の旅　――オーストラリアの文書館に残された戦前の日本企業の文書からみた「満蒙」の羊毛問題――

（１）自己紹介――私の研究関心がこの講義に辿り着くまで

①２０世紀初頭以降の中国東北部（満洲）における清朝皇室・モンゴル王公等の土地財産（皇産・蒙地）の解体・民有地化――土地市場の創設

そうした民有地化の過程のなかで台頭してきた在地有力者層と張作霖・張学良政権、「満洲国」との関係――張家や袁家の人々――――中国の文書館・図書館、日本の各図書館・外交史料館などの文書館、米国の議会図書館等での調査。

②満洲の土地市場化のなかで日本の会社の果たした役割。日本は食糧（水稲・羊肉）、衣料原料（羊毛）等の生産、日本国内からの農民の移住のために土地を必要とした。政府官僚、軍、満鉄・東洋拓殖、大倉組などの各会社、中国人有力者などとの間に展開した複雑な関係。

③上記の問題の一端をオーストラリアに残された資料からもとらえることができる。

本日の課題――オーストラリアに残された史料から「満蒙」の問題を見る

そこから、私の図書館・文書館における仕事の一端を紹介する。

（２）太平洋戦争開戦時、オーストラリアに駐在していた日本商社の社員たち

三菱商事シドニー支店長菊地四郎の報告書

「事務引継書　シドニー引揚報告書」（昭和 17 年 10 月 11 日）三菱史料館所蔵。

太平洋戦争開戦、収容所での生活を経て、交換船による日本への帰国まで

シティーオブカンタベリー号・鎌倉丸の航海　（日本郵船歴史博物館）

日本の会社のシドニー駐在員であった高商（一橋）卒業生も同じ運命を辿った。

「**表１**　如水会シドニー・メルボルン支部会員名簿」（昭和 16・17 年）

（一橋大学学園史資料室）

（３）当時、オーストラリアに駐在した日本人商社員にとっての仕事

①接収された日本企業シドニー支店の文書

オーストラリア国立公文書館（シドニー館）には開戦直後、オーストラリア政府に接収された日本企業シドニー支店の文書が大量に所蔵されている。「**表 2**　オーストラリア国立公文書館（シドニー）に所蔵されている日本企業の文書」

サンプル的に調査を行った大倉商事関係の書類のなかには、シドニー支店長であった飯田宗治の残した文書等が残されていた。「**表３**　飯田宗治氏の略歴」

とりわけ、そのなかには多くの名刺の束が納められていたーその多くが満蒙関係の名刺であった。なぜ、「満蒙関係者」なのか？「**表４**　大倉商事シドニー支店から接収された名刺の一部」（オーストラリアでの調査に加え、東京経済大学図書館、進交会[横浜商業学校同窓会]への訪問）

②シドニー支店の重要な仕事はオーストラリアから羊毛を輸入することであった。

ここに羊毛をめぐる、日本、満蒙、オーストラリアを結ぶ問題が浮上してくる。

（４）羊毛の戦略的重要性

①日本における羊毛需要の増大

軍人、警察官、郵便配達夫等の制服のための需要と洋服の普及

とりわけ、軍需品としての羊毛の重要性

②羊毛の原産国とイギリスの世界戦略

・衣料原料となる良質な羊毛はオーストラリア、南アフリカ、南米等を主な原産地としていた。とりわけ、オーストラリアのニュー・サウスウェールズ州を中心とする地域ではメリノー種の羊が多数飼育されていた。メリノー種はもともとスペイン原産であったが、１８世紀末に南アフリカ経由でオーストラリアにもたらされた。一方、アジアで飼育されていた羊の毛は衣料原料としては不向きであった。羊毛は南半球で生産され、北半球で消費される構造となっていた。

・　羊毛産出国の多くは英国の植民地であった。英国にとって、羊毛は自国の世界戦略を展開するための重要は商品であった。「**表５**　世界の羊頭数と羊毛生産量（1930 年頃）」

③羊毛の日本への輸出

・日本とイギリスが同盟関係にあった第一次世界大戦中においても、イギリスはオーストラリアから日本への羊毛輸出を厳しく制限していた。第一次大戦後から第二次大戦にいたる時期において、日本とオーストラリアとの関係はそれぞれの時期において、複雑な様相を呈していた。いずれにせよ、この間、日本とアメリカ・イギリスとの関係が悪化していくなかで、日本とオーストラリアとの関係も緊張したものとなり、オーストラリアによる羊毛の対日輸出制限は強化されていく。

・　他方、オーストラリア国内では、イギリスとの関係を尊重し、羊毛の対日輸出規制を強化しようとする連邦政府と、輸出の継続を求めるニュー・サウスウェールズ州等との間に意見の対立が存在した。

（オーストラリア国立公文書館（キャンベラ）、オーストラリア国立図書館など

での調査）

④羊毛調達のための代替策模索

・南アフリカ・南米等からの羊毛の輸入――結局、コスト等の問題もあり、成果をあげられなかった。輸入代替策についての、幾つかの貴重な報告書を確認できる。

・　さらに、満洲、内モンゴルにおける羊毛生産を開始する計画が国家プロジェクトとなっていく。しかし、そこには、羊毛の質、取引ルートの問題などが存在した。（オーストラリア国立図書館などでの調査）

実際に羊毛の輸入等に携わったのは民間の企業であり、ここに、企業文書の重要性が指摘できる。

（5）満蒙における羊毛生産の試み

井島重保『満蒙ニ於ケル緬羊及羊毛ニ関スル踏査報告概要』（昭和8年11月）

井島はシドニーの緬羊学校で学んだ技術者であり、日本における羊毛問題の第一人者であった。井島は陸軍千住製絨所、関東軍、拓務省、東京商工会議所、南満洲鉄道株式会社からの嘱託を受け、昭和8年5月から9月までの期間、満洲・内モンゴル・朝鮮・九州・四国における緬羊・羊毛の生産事情を調査した。

但し、報告では、井島は満洲・内モンゴルにおける良質な羊毛生産の将来には悲観的であり、その実現のためには多くの困難が存在していることを強調していた。

（国立国会図書館・一橋大学附属図書館などでの調査）

（6）まとめ

①資源をめぐる経済史研究（日本、オーストラリア、満洲・内モンゴルの歴史）

②国の政策だけでなく、経済活動の現場を担った企業等を対象とした研究の重要性
　私文書の重要性が指摘できる。

③一国史、あるいは、二国間の歴史を越えた、世界史的な視点の重要性
　同時に、一国の内部に存在した複雑な利害関係の対立
　　国境を越えての図書館・文書館における調査の必要

④研究を進めるうえで、図書館・文書館・博物館等を結んでの有機的な作業が必要になる。